

酒造好適米品種「夢の香」の栽培法

松本 靖・大谷 裕行*

(福島県農業試験場会津支場・*福島県農業試験場相馬支場)

Cultivation Method of a New Brewer's Rice Cultivar, "Yumenokaori"

Yasushi MATSUMOTO and Hiroyuki OYA*

(Aizu Branch, Fukushima Prefecture Agricultural Experiment Station・)
 (*Soma Branch, Fukushima Prefecture Agricultural Experiment Station)

1 はじめに

福島県で育成した「夢の香」は、良質な酒造好適米であり、福島県で作付けされてきた「五百万石」に比べ、耐倒伏性に優れ、心白の発現が良好である。本県では2000年から奨励品種に採用した。ここでは、a当たり収量60kg、1等米以上の格付けを目標とする本品種の施肥法について明らかにした。

2 試験方法

- (1) 試験実施場所：福島県会津農業センター
- (2) 試験年次：1999年及び2000年
- (3) 供試品種：「夢の香」
- (4) 苗の種類：稚苗(乾籾180g/箱播) 21日苗(1999年), 19日苗(2000年)
- (5) 移植方法：田植機で5月18日移植(1999年), 1株3本を5月17日手植(2000年)
- (6) 栽植密度：20.1株/m²(1999年), 20.8株/m²(2000年)
- (7) 施肥量(kg/a)：Nは区の構成による。P₂O₅, K₂Oは1.2とした。
- (8) 試験規模：1区45m² 1区3連制(1999年), 1区49.5m² 2区制(2000年)
- (9) 区の構成：窒素追肥量(kg/a)(表1)

3 試験結果及び考察

- (1) 生殖生長期の施肥法別葉色推移の年次間差
 1999年は、追肥時期が遅れたにもかかわらず、幼穂形成

表1 試験区の構成

No.	区名	基肥	追肥予定日		実際の追肥月日
			幼穂形成期(-25日)	減数分裂期(-15日)	
1	4-2-0	0.4	0.2	-	1999年
2	4-0-2	0.4	-	0.2	幼穂形成期 -18日(7.16)
3	4-2-2	0.4	0.2	0.2	減数分裂期 -11日(7.23)
4	6-2-0	0.6	0.2	-	2000年
5	6-0-2	0.6	-	0.2	幼穂形成期 -21日(7.10)
6	6-2-2	0.6	0.2	0.2	減数分裂期 -13日(7.18)
7	8-2-0	0.8	0.2	-	

注. 2区(4-0-2)は2000年のみ実施

期追肥時の葉色差は少なく、7月中の葉色が34以下になる区はなかった。また、追肥後の葉色差も小さかった。2000年は、1999年よりも退色が約7日早く、幼穂形成期追肥時の葉色差は大きかった。また、幼穂形成期追肥をしない区は7月17日の葉色が33以下まで低下した。追肥後の葉色差も明瞭であった(図1, 図2)。

(2) a当たり60kgを目標とする穂数確保のための生殖生長期の栄養管理

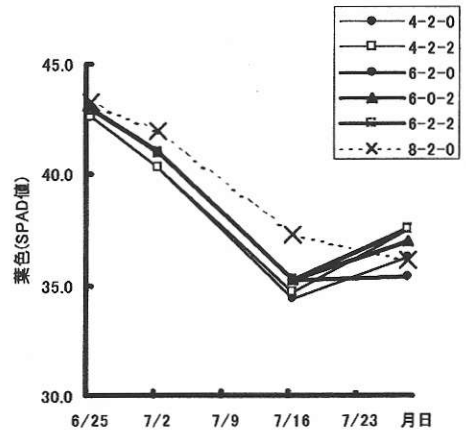


図1 基肥、追肥と葉色の変化(1999年)

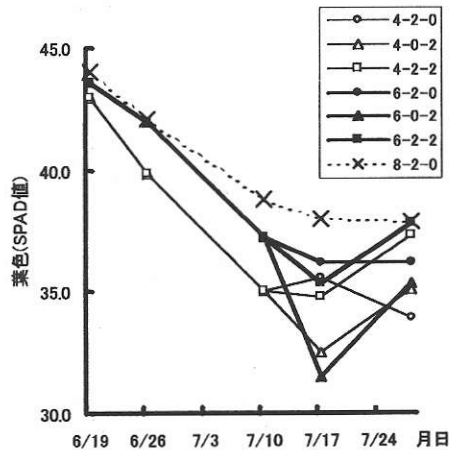


図2 基肥、追肥と葉色の変化(2000年)

稚苗を栽植密度(30×16cm)で移植する場合、無理のない収量構成要素の目標は㎡当たり穂数が380本、1穂粒数71粒、登熟歩合85%、千粒重26g程度である。2カ年では穂数、粒数の変動が大きかった(表2)。

7月4半旬の葉色が34以下になると、穂数は380本以下になり、減数分裂期の追肥により1穂粒数を増やさないで71粒数が不足する。しかし、減数分裂期の追肥は、品質が低下し易いことから、幼穂形成期の追肥により7月中の葉色を34~35に維持することが不可欠である(図3)。また、

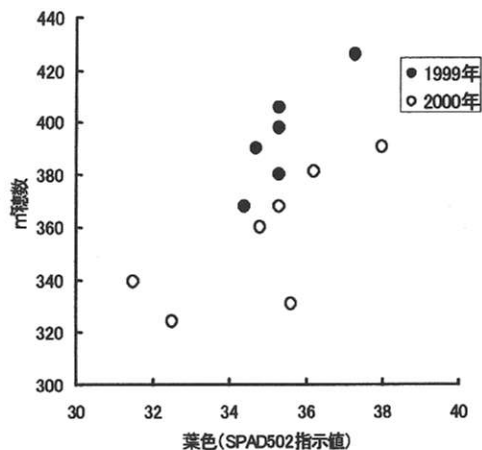


図3 7月4半旬の葉色と㎡穂数

稈長が85cmを超えても倒伏が認められないことから、肥切れが早い年は早目の穂肥施用も可能と考えられた。

(3) 施肥法と品質の年次間差

基肥が同じ区で比較すると、整粒と心白粒の比率、検査等級は、両年次とも減数分裂期の追肥により低下が認められた。また、㎡初数が少ない2000年は、1999年より整粒と心白の割合が高かった(図4)。

(4) 施肥法と酒造特性

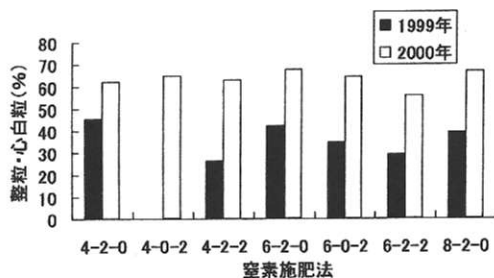


図4 施肥法と整粒・心白粒の比率

表3 酒造特性

No.	区名	真精米歩合(%)	碎米率(%)	粗蛋白(%)
1	4-2-0	72.0	14.7	4.7
3	4-2-2	72.7	15.2	5.3
4	6-2-0	73.7	5.4	4.7
5	6-0-2	73.0	12.4	5.1
6	6-2-2	71.9	15.6	5.2
7	8-2-0	71.7	13.9	5.1

注. 真精米歩合(%) = 白米千粒重 / 玄米千粒重 × 100
各項目は福島県ハイテクプラザ会津若松の分析

1999年の酒造特性は、基肥が同じ区で比較すると、減数分裂期の追肥により、碎米率、粗蛋白が増加する傾向にあった(表3)。

4 ま と め

以上の結果、「夢の香」の栽培法はa当たり収量60kg、1等米以上の格付けを目標とする場合、①㎡当たり穂数380本が安定して確保でき、また、幼穂形成期の追肥ができる基肥量0.6kg/aとすること、②生殖生長期にあたる7月中旬の葉色を34~35の範囲に維持すること、③減数分裂期以降の追肥は、品質と酒造特性低下の要因となるため控えること、が重要である。

表2 収量及び収量構成要素(上段は1999年, 下段は2000年)

No.	区名	稈長(本/㎡)	穂数(本/㎡)	倒伏(0-4)	総重(kg/a)	精玄米重(kg/a)	1穂粒数(粒)	㎡初数(×100粒)	登熟歩合(g)	千粒重(g)	検査等級(1-9)
1	4-2-0	79.5	368	0	154.9	64.1	73.4	270	89.6	26.7	3.0
3	4-2-2	80.1	390	0	161.2	68.1	73.2	285	88.3	27.0	3.0
4	6-2-0	80.6	398	0	162.8	67.0	70.1	279	89.9	26.1	3.0
5	6-0-2	81.1	380	0	167.4	68.6	76.3	290	91.9	26.6	3.0
6	6-2-2	80.3	406	0	172.2	69.9	72.5	294	89.1	26.7	5.0
7	8-2-0	81.0	426	0	177.7	74.1	75.2	320	89.3	26.3	4.5
1	4-2-0	83.3	331	0	166.3	66.4	73.3	243	86.9	26.8	2.0
2	4-0-2	82.3	324	0	156.6	61.8	75.2	244	88.9	26.3	2.0
3	4-2-2	74.2	360	0	173.3	71.7	78.6	283	90.2	26.4	2.5
4	6-2-0	86.4	381	0	177.4	71.3	74.2	283	90.0	26.1	2.0
5	6-0-2	83.4	339	0	170.9	69.2	75.9	257	91.1	26.3	2.5
6	6-2-2	88.0	368	0	187.9	77.5	78.8	290	89.0	26.3	3.0
7	8-2-0	87.3	391	0	186.6	75.5	77.7	304	90.6	26.2	2.5

注. 精玄米重, 登熟歩合, 千粒重は篩目1.9mm以上を上米とした検査等級は福島食糧事務所会津坂下支所検査